

— <書 評> —

彭徳懷著／田島 淳訳

『彭徳懷自述』（サイマル出版会）

（開成高校教諭） 三好 章

1978年12月の11期3中全会以来、文化大革命は人々に災厄のみをもたらしたものと完全否定され、同時に、前後して文革期に失脚、あるいは批判された人々に対して、次々と名誉回復が行われた。その最大の者は劉少奇・鄧小平であった。さらに、その中には1959年の6期6中全会（廬山会議）で大躍進を批判して失脚し、一度復活したものの1966年12月に再び失脚し、査問にかけられた彭徳懷がいる。本書は、その彭徳懷の自伝である。本書は、後述のように成立過程に複雑な事情があるが、その内容全体は彭の中国革命と新中国における体験であり、資料として貴重であるばかりか、自伝文学としても人を感動させるものを持っている。

彭徳懷は、中国革命の中でよく知られた人物であるが、ここで簡単に履歴を紹介しておこう。

彭は1898年、湖南省湘潭県に生まれた。1893年には同じ湘潭県に毛沢東が生まれている。幼いころ生家が没落し、生後半歳の末弟が餓死する悲劇の中、物乞いまでした。さらに15歳になると、祖父、父、弟など一家6人を養うため人夫仕事についていた。その後1916年3月、18歳に半歳足りぬ彭は、一家の生計のため湖南省陸軍第2師団第3旅団第6連隊第1大隊第1中隊に入隊した。ここから、彭の軍人としての履歴が始まるのである。この中で、彭は彼の一生を変える黄公略と李灿に出会った。北伐で鍛えられた彭は、1928年4月入党。同年7月、平江蜂起を貫徹し、改編されて成立した紅5軍第4、第5縦隊を率いて12月に井冈山へ入り、毛沢東たちと合流する。1928年は、彭の思想と行動がドラスティックに変化した1年であ

あった。その後、彼は長征に参加し、抗日戦争開始後は八路軍副総司令として百団大戦などを指揮。人民解放戦争では、中国人民解放軍副司令員、第1野戦軍司令員兼政治委員。新中国成立後は、中共中央軍事委員会副主席、中央人民政府革命軍事委員会副主席、国防委員会副主席、國務院副総理兼国防部長などを歴任。また朝鮮戦争では中国人民志願軍司令員兼政治委員。そして、上述のように失脚し、1974年11月29日、失意のうちに北京で病死した。

彭徳懷のこうした生涯は、朱徳、賀竜などに相通ずるものがある。即ち「老一輩革命家（前の世代の革命家）」であり、貧困の中から身を起し、軍人となって革命に尽力し、新中国成立後は要職に就くものの文化大革命で失脚、不遇、失意のうちに世を去っている。彼らはインテリではなかった。どことなく親分肌のところがあり、会議室より現場を好んだ。彭徳懷自身、自らを「張飛のような単純な男」（本書374頁）と称している。それは、彼の率直さであり、持分をわきまえた発言であった。言いかえれば、彭徳懷は何事も自分の思った事、考えた事をそのまま口に出さずにはいられぬ男だったのではないだろうか。また、毛沢東を自分とともに革命を戦った同志であり、信頼しきっており、尊敬しつつも少なくとも崇拜の対象にはしていなかったのであろう。だからこそ、後述する「八万言書」を書き、毛沢東宛の私信をしたためたのであろう。

1959年の廬山会議では、彼は大躍進政策を真向うから批判した、とされて来た。しかし、本書に納められている1959年7月14日付の毛沢東宛の書翰には、確かに大躍進を批判した部分があるが、それが中心ではなく、基本的には支持している。批判したのは「上っ調子の気分（原文：浮誇風氣）」「小ブルジョア階級の熱狂性（原文：小資産階級の狂熱性）」であり、大躍進期において、下部からの誇大報告が上級の計画を狂わせ、「实事求是」

の精神とかけ離れたものになる事であった。現在から見れば彭徳懷の指摘は正しかった、と言えるであろう。しかし、当時はどう受けとめられたのであろうか。大躍進は、まさしく「熱狂的運動」として展開されたのではなかったのか。1960年代には共産主義社会に入るという目標が提起され、それにバラ色の夢を感じた農民、労働者にとって、彭徳懷の発言は冷水をあびせるようなものであったろう。解放前の悲惨な生活から脱け出したばかりで、なお豊かになろうとした農民、労働者は、彭徳懷の発言を反革命と受けとって不思議ではないし、彼らの側に立っていた毛沢東も同様であったと思われる。失脚させた方が誤っていた、大躍進は完全な失敗であった、とするのは単なる結果論にすぎないのではあるまいか。問題は、それを引き起した政治的社会的構造にある。彭徳懷はその意味で犠牲者であった。確かに、大躍進が「熱狂」の中で展開された事自体に問題があり、批判——それが正しいものであっても——を許さぬ雰囲気は問題である。しかし、根はより深いものではないだろうか。中国社会主義の成立、成長過程の中に、それを求めるべきであろう。

さて、本書の「訳者まえがき」も言及され、また、1962年に彭が自己の履歴と失脚にかかわる罪状についての弁明を党中央と毛沢東に対して記したと、従来言われてきた「八万言書」は、これまで未公開とされていた。ところが、内部発行書籍の『党史研究資料 4』（四川人民出版社、1983年、月刊の『党史研究資料』（内部発行）の中から各年毎に多くの論文、資料を選び出し、合本にしたもの）に、聞佩の「『彭徳懷自述』についてのいくつかの事情」（月刊、1982年2号）があり、その中に「八万言書」についての新しい事実が述べられている。そして、これは後述する本書の編集材料を明らかにしている。『彭徳懷自述』の中でさえ、彭が査問の中で「何部かの経歴書類を書き」（本書2頁）、「1970年に書かれた自伝風の

文章が比較的詳細かつ系統的である。……これらの文書を合わせ整理して、この『彭徳懷自述』とした。」（同前）と述べるだけで、「八万言書」については直接言及していない。ところが、聞佩によれば「1970年の手記（査問委の要求で彭が書いた自伝。『彭徳懷自述』はこれが中心と考えられていた——引用者）と『八万言書』の自伝の内容とはおおむね同じであり、……『自述』の第12章まではこの手記を基礎にその他の経歴書類と対照し、それぞれの詳細な部分を探って簡略な部分を補い、整理してできあがった。残りの3章『解放戦争（人民解放戦争——訳書）』『抗美援朝（抗美援朝戦争——訳書）』『廬山会議前後（廬山会議の試練——訳書）』は、『八万言書』から採った」（736頁）という。また、第13～第15章の原本のページ数からは約2万5000字であることがわかり、「八万言書」が8万字弱であると推定すれば、約30%強が発表されたことになる。一方、第1～第12章が「八万言書」と内容が重複するとすれば、微妙な部分は別であろうが、「八万言書」の全容がほぼ明らかになったと言ってもよいであろう。

本書の編集材料は、聞佩によれば次の通りである。①『住事回憶』：『近代史研究』1979年1号に掲載された自伝で、廬山会議に関連して執筆されたもの。これは1961年に初稿が書かれたが、文革期に滅失を恐れた彭の甥が山中に埋め、さらには台所近くの豚小屋のそばに埋め直し、1978年の11期3中全会で彭が名誉回復された後、『近代史研究』に発表された（732～734頁）。②供述書として査問委に書かされた1970年8月の手記：これは1967年に設けられた査問委に強要されたもので、合計20万字にのぼる。11期3中全会後、査問委の檔案を詳しく調査して発見された（735頁）。③「八万言書」（734～735頁）。

最後に本書の内容について触れたいが、もう紙数も尽きており、詳細については是非一読願いた（11頁へつづく）

の意識界に他ならない（李喬は長年、仏教の聖典を研究し修練を積んだ）。

この長篇大作を細かく分析すれば、勿論いろんな小さな欠陥が出て来ようが、長年、台湾人作家の夢である「台湾人三部作」を集大成したことに違いないのである。

（15頁からつづく）

さん懸案のこの件は病床で口述、「おやじがハッキリした口調で話をしたのはこれが最後でした。あのあとずっと昏睡状態がつづきました」という。12月30日午後、鶴さんからの電話で永眠を知った。84歳。85年1月19日、葬儀・告別式。

85年秋、内山完造生誕100年、東京内山書店創業50年記念行事が、神保町新ビル落成とあわせ計画中という。わたしたちはこぞってこれに参加し、あらためて完造・嘉吉、このたぐい稀れな兄弟の不滅の足跡を偲びたいと思う。（85・2・3）

（42頁からつづく）

（5）中共地方機関誌一覧（解放後～文革）

〔書評〕

小田実『毛沢東』	渡辺一衛
松永正義ほか訳『終戦の賠償——台湾現代小説選Ⅱ』	下村作次郎
鄭然権・傅永康訳『長江万里行』『黄河万里行』	長野広生
片岡幸雄『中国における対外貿易論の新展開』	游 仲勲
『中国近現代史の諸問題』	並木頼寿
山根幸夫編『中国史研究入門 上』	原 宗子
山根幸夫編『中国史研究入門 下』	白川知多
山際素男『インド 大地の歌声』	佐藤公彦
竹内実監修『毛沢東集補巻』2・3	村田忠禧
田島淳訳『彭徳懐自述』	三好 章
『中国研究月報』総目録（431～442号）	

（17頁からつづく）

先生は、戦中・戦前のことについて、「中国に申しわけないことをしてきた」と、ことあるごとによく言われた。このことは、戦後の先生の諸分野における研究の思想的な・精神的なささえの重要な部分となっていたものといっても過言ではないであろう。中国との友好を考えると、どうしても過去の非友好まで歴史をさかのぼって、そこから友好を考えることになる。実藤先生もやはりそうであった。

いま先生をしのんで、あれこれと先生のことをかきました。

先生！ どうぞいつまでもお元気で。

（1985・2・2）

（39頁からつづく）

い。ともかく、彭の死後に編集された『彭徳懐自述』は、彼の革命に捧げた人生を知るための格好の資料であり、また中国革命の生証人の言葉として貴重なものである。先に述べた「人を感動させる」点はここに由来する。それは、革命の修羅場をくぐり抜け、多くの同志や友人の死に歯噛みした者でなければ語り得ないものであろう。こうした、解放前に関する叙述は圧倒的でさえある。我々はすでに『中国の赤い星』『偉大なる道』など、中国革命の領袖の自伝的古典を有しているが、ここに新たに『彭徳懐自述』という新しい財産を与えられたのである。三者とも、中国が近代から現代に移行する中で奮闘した人物の語るものであり、近代中国の苦悩と希望の人格的表現である。即ち、一人の貧しい家に生まれた人間が、多くの試練の中で自己変革をとげ、革命家に自己を成長させていった姿がそこにある。

本書について難を言うとするれば、原註のみでなく、もっと多くの訳註が欲しい点のみであろう。

（1984年4月刊、B6判、413頁、1800円）